

---

# 紅蓮と聖獣

内海秀嗣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅蓮と聖獣

### 【Nコード】

N2972A

### 【作者名】

内海秀嗣

### 【あらすじ】

ロア・クリスタル最強の騎士、ユリアン。アルテナの姫、アルテイー。二人の運命の出会いと物語。

## プロローグ 紅蓮の騎士

辺境の地にある国。      ロア・クリスタル

この国の王は伝説を持つ人間だった。

その昔、次期の王アランは親友のロイと、山に突如現れた竜の皇帝を倒すという使命を与えられた。  
はつきり言って命の保証は無い。

しかし、勇敢な青年アランとロイは引き受けた。

永遠にも感じられる時間が経過したところに、アランが限界と見たロイが竜帝に最後の勝負を仕掛けた。

そしてそのまま、火山の火口の中に竜帝と共に落ちていった。

ロイとアランは英雄となった。しかし、ロイは帰らぬ人となった。

それから十年という月日が経った。

今は王国で開かれた武芸大会が行われている。

その決勝の舞台に立っている一人の青年。彼の名前はユリアン。  
決勝の相手は騎士団長レイチェル。

「では、始め！」

審判の男の手が高々と上がる。それと同時にユリアンがレイチエルの懷に飛びこむ。

鳴り響く金属音。目にも止まらぬ速さで繰り出される三回の突き、レイチエルの必殺技とも言える物だった。

その瞬間レイチエルの直線的な攻撃に対して、ユリアンが宙を回転しながら舞い、避けながらの攻撃でレイチエルの脇を仕留める。

「勝負在り！優勝はユリアン！」

ドッと歓声があがった。

ユリアンは王国の剣士の中で一番の強さとなった。

「見事だユリアン。やはり血は争えないな、ロイの子よ」

口を開いたアラン。

ユリアンは、英雄ロイの子だった。そして母はユリアンを産んだ時に死んでしまったため、今は養子として母の妹のところに預けられている。

「まるで若いころのロイを見ているようだった。その緑の髪、赤く燃えるような真紅の瞳。そっくりだ。ホントにロイを思い出す。まあ、優勝おめでとう」

そうアランが言った後に拍手が起きた。

## 次の日の夜。

見張りをしていたユリアンは、昨日の疲れからか、その場で静かに眠ってしまった。

ユリアンは体を照らす炎の熱さで目覚めた。

「しまった！俺が寝てる間に城が！」

ユリアンは急いで門へと走った。

正門は跡形も無く壊されていた。直ぐそこに兵士が一人倒れていた。

「おい！大丈夫か！？何があった！？」

兵士を抱えて起しユリアンは叫んだ。

「ユ、ユリアンか…… たった一人で鎧を着た男が攻めてきた…… 奴は、強すぎ……」

言い終わる前に兵士の息が絶えた。

兵士に静かに祈りをささげると、ユリアンは階段を上った。

「ユリアンか？……」

そこに居た一人の兵士が話しかけてきた。

「その扉から入って行った…… あいつは、お前にしか止められない…… 王が危ない…… 早く！」

そう言うのと兵士はガクンとして倒れた。ユリアンは王の元へと向かった。

その途中でユリアンは見た者は、紅蓮の鎧を着て、魔界の剣らしき恐ろしい妖気を込めた剣を持つ、一人の男であった。その目の前にレイチエルが立ちはだかつていた。

「貴様！何者だ！名を名乗れ！」

威勢良く叫ぶレイチエル。

「フシユウ、まあ、紅蓮の騎士とでも名乗っておくか、な」

「舐めやがつて！覚悟！」

レイチエルが自慢の突きで切りかかるも、嘲笑うかの如く、紅蓮の騎士は一振りでレイチエルを斬った。

「な、馬鹿な！」

レイチエルが倒れたのを見たユリアンは、紅蓮の騎士を先回りして待ち伏せた。

扉が開く、そして入ってくる紅蓮の騎士。

「ここからは通すわけにはいかないぜ！紅蓮の騎士さんよ！」

剣を抜いて斬りかかるユリアン。

しかし、何度も何度も斬ったが、何故かいつもかわされる。

そして最後に渾身込めた横振りが、いとも簡単に手で受け止められてしまった。

「な、何？馬鹿な、うそだろ」

その光景にユリアンは信じられなかった。  
そして紅蓮の騎士は、ユリアンを斬った。  
血飛沫がユリアンの腹部からでた。

「この騎士どもは弱いな」

そう言った紅蓮の騎士にただ一つ、怒りの感情だけでユリアンがたつた。

「ほお？まだ立つか、ならこれはどうだ？」

ユリアンは初めて見た。

ただ空を斬ったと思った剣なのに、自分の体を傷つけた。

（し、真空波だ、聞いた事があるぞ。初めて食らったぜ）

そのままユリアンは気絶をした。

「気絶か、まだ生きているとはな、面白い！この国の侵略はまだ後にしよう」

そして紅蓮の騎士は消え去った。

それから、ユリアンやレイチェルは傷が癒えるも、二人の犠牲者を  
出してしまった。

（俺のせいで二人も……この国にはもう、居れない）

ユリアンはそうして育ててもらった親に、夜、静かな別れを告げ、  
家を出た。

そして国の出口についたころ、朝日が昇っていた。  
そこにはレイチェルが居た。

「よう、ユリアン。やっぱりお前の事だから出ていくと思ったぜ……  
…アラン様と呼んでる。出ていく前についてきてもらうぜ」

そう言ったレイチェルにユリアンは小さく頷き、アランの元へ向か  
った。

「出ていくのか？ユリアン。何もお前のせいと決まったわけではな  
いぞ？」

アランが言った。

「しかし、アラン様。二人の犠牲者が出ていますし、俺が寝ていな  
ければ……」

ユリアンはそう言った。

「自惚れるなユリアン！！貴様が寝てなかったとしても、あの男



は倒せなかっただろう!」

怒鳴ったのはレイチエルだった。

「アラン様! 提案があります!」

ユリアンはきつとレイチエルが、死罪を出すと思っていた。

「ユリアンを国から追い出し……強くなるまで、紅蓮の騎士を倒すまで、永久追放しましょう」

レイチエルが言ったのは違っていた。

「そうか、………そうしよう。ユリアン! 紅蓮の騎士を倒すまで、永久追放とする!」

アランが言った。ユリアンは涙を目に浮かべて、大きく頷き、その場を後にした。

こうしてユリアンは、紅蓮の騎士を倒す旅に出たのであった。

## プロローグ 紅蓮の魔術師

高く、天まで届きそうに高い。アルテナ山。  
その近くにあるのが、世界で一つの魔法国。      アルテナ。

この国には夏が来ない。永遠に冬のままである。  
アルテナは一人の皇女によって治められている。  
皇帝はすでに他界し、男の息子が居ないため今の皇妃が皇女になった。

皇女の名前はアルテナ。この国の名前のアルテナは国を治めたものに受け継がれる。

今の皇女で32代目である。

皇帝になった者は不思議な魔法の儀式により、先代の皇帝の全ての能力が継承される。

そのため、反乱などが起きないのだ。  
アルテナには娘が一人居た。

娘の名前はアルティー

「姫様。今日こそ魔法訓練を受けてもらいますよ」

アルティーの執事である男がそう言った。

「えゝ？面倒だし、お母さんの力を継承するからいいじゃん！」

そう言うアルティー！。

「いけません！ある程度の力が無いと、儀式は実行できないんです！それに、そんな言葉使いじゃ、皇女様に顔向けできませんよ！」

「大丈夫だよ。あたしは天才だから」

言うことを聞かないアルティー。執事も困り果てていた。

そして今の皇女ことアルテナは、周辺の国との会議でもう四日ほど出かけていた。

「じい。ちよつと耳貸してくれない？」

そう言うアルティーは、人差し指を立てて誘う手招きをした。

「なんですか？そうしたら魔法訓練をしてくださいね」

渋々と近づく執事。

執事が近づいたその時、アルティーは突然駆け出し、部屋から出ていった。

「ああ、しまったぁー！」

慌てて追いかける執事。

アルティーは逃げてから五分ほど経ったところ、アルティーは外からアルテナが帰ってくるのを見つけた。

「ああ！見て見て！お母さんが帰って来たよ！」

そう叫んだアルティーは、一直線にアルテナのもとにいった。

「お帰り！お母さん！」

アルテナのもとに走り込むアルティー。

その時初めて見る男がアルテナの隣に立っていた。

その男は怪しげな金髪に、エメラルドの眼から放つ眼光、そして紅蓮のマントを着ていた。

「これがアルテナ様の娘。アルティー様ですか。やはり美しくそして、威厳もある」

紅蓮のマントの男は言った。

「皇女様。お帰りなさいませ。……その男は？」

後から追いついた執事が言った。

「この者は私の雇った優秀な魔術師です」

アルティーはこの魔術師の出会いに嫌な気配を感じた。

その日から、アルテナは疲れていると言って、アルティーと話さない時が増えた。

そんなある日

「なんかおかしい！あの赤マントの奴だ！あいつが来てからお母さんはおかしくなったんだ！」

そう言っただけで確信したアルティーは紅蓮の魔術師の所へと向かった。ずんと重い扉をあけるとそこにはアルテナと紅蓮の魔術師が居た。

「アルティーですね？ちょうどいい所に来ました。これから重大な話があるのです。いいですか？あなたは魔法訓練に精を出さないようですね。もうあなたには呆れました。私の後継ぎは紅蓮の魔術師に任せます」

アルテナは言った。その言葉はアルティーに深く刻み込まれた。

「待つてよ！私これから魔法訓練もちゃんとやるから！」

当然のようにアルティーがそう言う。

「黙りなさい！あなた、知っていますよ。魔法が使えないんですよ。う？それで訓練にも顔を出さないで、しかも私の子だというだけで天才だとか自惚れて！」

凶星であったアルティーは何もいえなかった。

「あなたは破門です。即刻この国から立ち去りなさい！」

アルテナが叫んだ。

「まあ、アルテナ様。アルティーだって使い様が無いわけではないんですよ」

なだめるように紅蓮の魔術師が言った。

そして、紅蓮の魔術師はアルテナの耳にそつと言った。

「なるほど……アルティーを牢に閉じ込めておきなさい！」

そうしてアルティーは牢獄に閉じ込められてしまった。

閉じこまれてどれだけ時間が経ったか、アルティーには解る分けなかった。

「姫様、聞こえますか？ 姫様！」

「じい？ じいなの？ どこにいるの？」

「壁の向こうでございます。今爆破するので離れください」

言われたとつりに後に下がるアルティー。  
すると最小限の爆破音で壁が破壊された。

「姫様！ 説この通路を抜ければ出口です。出口に出たら急いで他の国へ行つて下さい！ 後の事は私に任せてください」

アルティーは今まで見たことの無い執事の顔を見て、全てを悟った。

「姫様。お別れでございます。皇女様はあなたの小さな魔力に潜在能力があることをお気づきになったのです。その魔力を全て、抜き取る気なのです」

「そんな、うそでしょ？でも、ホントなのね」

執事は深く頷いた。

アルティーは涙を浮かべて、出口へと走っていった。

アルティーは、全ての根源は紅蓮の魔術師に違いないと思った。

アルティーの旅はお母さんを元に戻す事だった。





## 第1話 聖獣と眼

紅蓮の騎士を倒すまで、ロア・クリスタルから永久追放を命ぜられたユリアン。

（　　紅蓮の騎士。強かった、とても俺のかなう敵じゃない。でも、強くなる方法はあるはずだ。絶対。でもどうやって？）

酒場で一人蹲るユリアン。

「てめえっ！インチキだろが！！やってられるか！」

後で叫び散す腕っ節の強そうな一人の男。

「ふう〜。言いがかりはよしてくれないか？それとも、金が払えないってのか？」

椅子に腰掛ける一人の美少年と言える男は呆れたように言った。  
その男は威厳を保つような雰囲気を持ち、深く帽子をかぶりコートを着ていた。

「ああそつだよ！こんなものインチキ意外にあるか！？」

罵声を散す男は手に持っていたランプを投げ捨てた。  
それを見たユリアンは、ため息をつきながらそのテーブルへと向かった。

「喧嘩か？ロアでは御法度だぜ？賭け事もな」

そう言うユリアンを罵声を散していた男が睨む。

「なんだあ？……緑髪に紅の眼。まさか…ユリアンか？」

ユリアンを見たその男は声を多少、声を嚔らしながら言った。

「だったら？」

剣に手をかけながらユリアンは言った。

「じよ、冗談じゃねえ！逃げろお！」

男はそのまま走り去っていった。

しかし腰掛けていた男は残っていた。

「ふう〜。ロアの最強剣士ユリアン様に見つかるとは運が無いねえ」

帽子からユリアンの覗いた眼は綺麗な蒼色をしていた。

「でも、あんた今は関係無いだろ？ロアとは。聞いたぜ？理由は知らんが永久追放だつてな」

その男はユリアンの事を知っていた。

「その通りだ。でもな、レイチエルという騎士団長が居るんだ。気を付けな」

「なんだ。レイチエルに追い出されたって思ってたけど違うみたいだな。そう言ったって事は」

何故かこの男の蒼の眼には全てを見透かされている気分だった。ユリアンはその場に居ずらくなり、酒場を出ようとして扉に手をかけた瞬間。

「あんだ。本当に強いのか？」

とっさに言われたその言葉にユリアンは振りかえった。

「なんだと？ どういうつもりだお前」

怒りの表情を浮かべユリアンは言った。  
するとその男は立ちあがり、そばにあった身の丈ほどある槍を出した。

その槍は剣先の部分が十字になっていて宝石がついていた。

「こういう事さ……」

おもむろにその男はそう言った。

「表に出ろ……」

限界を越えかけたユリアンはそう言って外に出た。  
外に出たユリアンは剣を抜き構えた。  
男も槍を振りかざした。

「俺の名はユリアン。ロアの誇りにかけて闘おう」

そう言ったユリアンに男は一度眼を閉じ、パツチリと開き言った。

「俺の名はヴァン。親の形見 装填十字槍そうてんじゅうしやうにかけて闘おう」

周りには沢山の山ができていた。

その中に宝石の装飾品に身を固める老婆が居た。

二人が睨み合い間合いを取るだけに半刻が過ぎようとしていた。

その時、強風がユリアンの追い風となって吹いた瞬間。ヴァンが踏み込んだ。

鋭く獲物をしとめる高速の突きだった。辛うじてかわすもユリアンの頬には赤い傷跡がついた。

ユリアンは剣の柄の部分と槍を擦り合わせながらヴァンの懐へと入っていく。

鳴り響く金属音。

さっきまで全く動かず間合いを取っていた二人は一転、激しい攻防戦となった。

二人とも鋭い攻撃を出せば堅い守りを見せる。目にも止まらぬ連続技の闘いであった。

「やめえ~~~~い!!!!!!」

二人が止まったのはその大声があつた瞬間だった。それを言ったのは先ほどの老婆であった。

「おい、なんだよ婆さん。近づくと危ないぜ?」

ヴァンの静止を無視し、老婆は二人の手を掴み強引に連れ去った。老婆の力は予想以上のものであり、二人は抵抗することなく老婆の家へと押し込まれた。

「おいあんたら若いの！自分の事が解ってやってるのかい！？」

怒った様子で叫ぶ老婆。

「解ってるさ。こいつが俺に喧嘩を売ってきたからやったのさ」

ぶっきらぼうに答えるユリアン。

ユリアンの頬に老婆のビンタが飛んできた。

「何にも解っちゃいないよ！ちょっと待ってな！」

そう言つて老婆は置くの部屋から古びた本を持ち出してきた。

「これはね、古い書物でね。あんたらの事が書いてあるんだよ！」

そう言われてヴァンとユリアンは本に目を通そうとするが、不思議な文字だらけで何がなんだか解らない。

「なんだよこれ？意味わかんねえ！？」

そう言つヴァンに老婆は言つた。

「これには聖獣ついて書かれているのさ！」

「聖獣？」

ヴァンとユリアンは不本意ながらも声が合わさった。

「そう。聖獣と言うのは聖なる力を持った獣でな、それと契約を結ぶと絶大な力を与えられる。その代わりに、聖獣がつくと永遠に離れないけどな」

（力……）

ユリアンは力と言う言葉に強く引かれた。

「おい婆さん。それはどうやって手に入れるんだ？」

ユリアンは興味心身で尋ねた。

「この世の何処かに居ると言われるが、詳しくは解らん」

そう言う老婆。

「うさんくせーな」

ヴァンがそう言うが、最もであつた。

「しかし、お前らを見て確信したよ。聖獣が居るってな」

「なんで？」

老婆の言葉にどうも信じられないヴァン。

「書物によると聖獣は火、水、雷、風の聖獣があるらしい。そしてそれぞれの聖獣には選ばれし者が居る。火には紅の眼を持つ者。水には蒼の眼を持つ者。雷には黄金の眼を持つ者。風には碧の眼を持つ者。それでな、お前らの眼の色よ。それで確信した」

「婆さん。俺はその力が欲しい！どうしたら良い！？」

ユリアンは血相を変えて老婆に尋ねた。

「ふん！私はあんたらを見なくなかったんだよ！聖獣の後継者が現れるって事は世界の危機って事なんだよ！まあ出たには仕方ない！あんたらが世界を守るんだよ！」

「ふん。それでかあ、まあいいぜその聖獣ってのを見てー気がするし、その話し……乗った！」

ヴァンが老婆を指差し言った。

「聖獣の事でわかんない事があつたら私のところに来るんだよ。ユリアンとヴァンとか言ったか？いやとは言わせないよ！さっさと行かないか！」

老婆はそう言って叩いて二人を追いつ出した。

「……テメーと行くのは嫌な事だが、強くなるためだ。協力してもらうぜ？」

ユリアンはそう言った。



「俺に付いて来れるか？」

ヴァンも負け地と言った。

## 第2話 紅蓮の強さ

ロア・クリスタルから南の森にユリアンとヴァンはいた。  
二人は無言で歩き続けていた。

「おい、てめー！本当にあつてんだろ？この道」

最初に口を開いたのはユリアンだった。

「おい！てめーが道は任せろって言ったんだろが」

半分怒りをいれ、言うユリアン。

「うるせえゝな。お前はテメー、テメーよお！俺にはヴァンと言う名前があるんだぞ！」

その態度にカチンときたヴァンも言った。

「俺は道のことを聞いてんだ！テメーとは一言でも少ない会話じゃねえーと嫌なんだよ！早く道は合ってるのか言え！」

「ヴァンって呼んでからじゃねえーと答えねえよ！」

気の合わない二人はちょっとした事で大きな喧嘩へと発展していく……のは日常茶飯事となっていた。  
すぐそこに強大な力があると知らずに。

前をあまり見ずに歩いている二人。

ユリアンは不思議な感触のものを踏んだ。  
それは何かの尻尾のようであった。

尻尾をたどると草の中に、草の中からできたのは何とも奇妙な怪物。  
獣の恐ろしき表情、強靱な体の四足歩行に鬣があり、そして翼が生えていた。

その獣はユリアンとヴァンをじっと見て唸っている。  
突然、口から火のような物を噴出した。

2人はなんとか交わす。

「ちっ！こいつはあぶねえぞ！」

とつさに判断し、叫ぶヴァン。  
火を避けながら、逃げ回り少しずつ攻撃していく。  
走り抜けるとそこは岩の壁だった。

「くそ！行き止まりかよ！」

追い詰められたユリアンは剣を構える。ヴァンも同様に。  
その時だった、低く大きな遠吠えの音が聞こえた。

奇妙な獣は猫に追い詰められた鼠のように縮こまった。  
その声が近づくにつれ獣は震えだし、遂には逃げてしまった。

声が無くなり辺りは静けさに包まれる。

森の中から出て来た者の正体は不気味の一言に尽きる。

全身が黒い鱗のようなものに鎧を着ている。

ぎよろりと飛び出す目玉に、ぱっくりと裂けている口。  
それは        ワニ。ワニ人間。

その得体の知れない者は口を大きく広げ言った。

「紅眼。蒼眼。こいつらだな」

そいつはユリアンとヴァンのことを知っているようであった。

「だからなんだよ！」

強気に出てみるヴァン。

「紅蓮の獣戦士……レブルセヴァー！貴様らを殺しにきたものだ」

そう言ったレブルセヴァーは手に持っている巨大な斧を振りかざし、  
垂直に落としてきた。

「受けるな！流せ！」

ユリアンがとつさに言った言葉を受けて、ヴァンは流した。  
それでも激しい金属音がする。

レブルセヴァーの斧は地面を砕いて50cmほど掘り起こしていた。  
（くそあ。あいつの言ったとおり受け流さなきゃ死んでたぜ。あの  
獣がビビッて逃げるはずだぜ）

「よく受け流したな。潰そうと思ったのに………けどな、次の俺  
の攻撃で終了だ」

そう言ったレブルセヴァーは右手を開きユリアン達に向ける。すると今度はこぶしを返し握る。力を溜めている様に。

その腕はだんだんと膨らみ始めた、最後には太さは40cmほどにまでもなった。

「これが紅蓮の獣戦士レブルセヴァーの奥義。クロコダイル・キャノン」

レブルセヴァーは膨らんだ腕を一気に開きユリアン達へと向けた。その開いて掌から出たのは、闇の力であろう漆黒であった。

『クロコダイル・キャノン』と言ったその衝撃波の力は、想像を絶する強力過ぎるものだった。

ユリアンとヴァンだけではなく、後ろの壁までもが吹き飛んだ。

全てを破壊し吹き飛ばすその残酷な闇の力を、二人は初めて知った瞬間であった。

轟音の連続。ユリアンとヴァンは、自分が宙に浮いているのがハッキリとわかった。

その瞬間は五秒と経っていない瞬間であったのに、二人には十年もの月日を感じられた。

その時二人は、生まれてから数えるほどしか出会ったことの無い感覚に襲われていた。

『恐怖』であった。全ての感情を抑え、この感情が一番に出ていた。

ユリアンとヴァンは自分達の目標の高さを新めて知るのであった。それと同時に二人の頭はいや、本能は『聖獣』の名が浮かび上がるのだった。

しかし二人は今、『聖獣』の事は意識できずにいた。

そして、紅蓮。と言う者達が、運命の狭間に居る邪魔者であり、最強の敵であり、倒さなくては進めない者達である事を、後に確認するのであった。

（あの時、紅蓮の騎士が放った真空波……あれは手加減だったのか？それともこいつのほうが強いのか？そもそも、紅蓮ってなんだろう？俺は、俺は……紅蓮っていうのを舐めていたのに過ぎないのか？）

ユリアンの頭の中は全てが紅蓮へと変わっていた。

（ユリアンってこんな化け物みたいな紅蓮って奴と、闘うのか？俺にできるか？あのワ二人間の衝撃波を、紅蓮のやつはみんな使えるのか？）

ヴァンも同じような事を考えていた。

そこには壊れた壁の岩と二人の戦士が倒れていた。

レブルセヴァーは自分の奥義『クロコダイル・キャノン』を食らって生きれるはずが無いと思い、その場を後にした。

二人の戦士の生死を確認しないで……

レブルセヴァーのミスは生死の確認だけではない、近くには聖都と呼ばれる都。

サテライン。がある事を知らずに過ぎ去った事であった。

### 第3話 黒髪的女性

母親を元に戻すべく、執事と別れ国から逃げて来たアルティは、船に乗りなるべく遠くの国を目指していた。

（この辺りまで来れば大丈夫かな？なんでも母さんはあんなんだろう？）

蹲り、逃げる事に必死だったアルティは、安堵すると急に母親の事を思い出した。

湧き上がる悲しみがあつた。

しかし、体の奥底から湧き上がる感情がもう一つあつた。

それは、『怒り』であつた。

（悔しいなああの赤マント！倒したい…でも、魔術師とか言ってたからなあ。魔法…使えるんだろうなあ、私使えないし…）

悲しみにそして怒りに暮れている間に船は大陸へとついた。港から出るとそこはなんにもない辺境の町であつた。

（必死に逃げて来たからな…何したら良いかわかんない）

辺りを見まわしてみても、活気が無く商店街なども無い、ただ住人が住むだけの町。

（この町、お店が無いなあ……なら何処かで買い物してるって事だよな）



「ねえねえおばさん！この辺りに町とか、無い？」

近くに居た中年の女性に話しかける。

「それならここから東に行った所に聖都があるよ」

「聖都ね……わかった！ありがとう」

そのあとアルティーは、勢い良く駆け出して行ってしまった。  
女性は他にも何かを言いたそうだった。

アルティーはそこに行けば、魔法が使えるかもしれない。  
そう思っただけだったが、アルティーの思った以上に、その道は険しく厳しいそして、魔獣が出る道だと気付くのは後の事となってしまうのだった。

清く、透き通った泉があった。  
そこで顔を洗う一人の女性が居た。

若く、白く透き通るような肌をしていて、黒く美しい髪、緑の服を

着ているが何処か聖女の様であった。

長く整った睫、細い眉毛にバラのように赤い唇。そしてエメラルドの瞳を持っていた。

その時であった。女性の悲鳴が何処からか聞こえてきた。

慌ててその黒髪の女性は、近くにある長い弓と矢を持って走り出した。

悲鳴は連続で続き、その声を聞きの確に近づき悲鳴が大きくなっていった。

草むらを抜けその声の正体を見た。

今にも飛びつきそうな獣が一人の女性を襲っている。

それを見た黒髪の女性は弓を引き絞った。

素早く打ったその矢は、獣をつら抜いた。

洗練された見事な動きであった。

黒髪の女性は改めて見たその助けた女性を、自分も女性ながらも美しいと思った。

頭にはバレッタのような物を乗せ、美少女と言うにはあまりにも大人っぽい女性であり、赤紫色の髪、そして露に見せた肌が印象的であった。

筋の通った鼻にピンと立った耳、そして黒色のような瞳だが、近くで見ないとわからない黄色も混じっていた。

「ありがとう！！凄いね見事に撃ち抜いちゃったよ！！」

女性は立ち上がると叫んだ。

「あなたは何故ここに？ここには魔獣がよく出るのですよ！私がいなかったら食べられてたかもしれないですよ」

黒髪の女性は血相を変えていった。

「だってえ、聖都に行く所で襲われたんだもん」

「聖都？聖都に行くのですね？だったら私の行く先と同じです。一緒に行きましょう」

「ホントに！？助かるー！！私アルティー！！よろしくね」

黒髪の女性は仕方が無さそうに、アルティーを連れ聖都まで連れていった。

その間に数匹の魔物が襲って来るも、黒髪の女性は弓矢でいとも簡単に倒していく。

アルティーはただ後についていくだけで、聖都まで難なく行けたのだった。

「さあ着きましたよ！あなたはあなたの用事を済ましてください。私はもう帰りますので……」

ぶっきらぼうにそう言うと言き出した黒髪の女性。アルティーは黒髪の女性に着いて行った。

「なんですか？私に着いて来て！」

「だってえ、私この町に来て、何して良いかわかんないだもん」

そう言うアルティーに呆れたように黒髪の女性は言った。

「なんですって？じゃあ何であの危険な道にいたんですか？」

言い終わったらアルティーは、泣きそうな顔で黒髪の女性を見ていた。

「はあ……何か訳があるのでしたら、私に着いて来て下さい」

黒髪の女性はそう言うと、アルティーはうれしそうに着いて行った。着いたのは立派な宮殿であった。

「うわあ、すつこい！ねえあなた、なんでここに来たの？」

「私はこの宮殿『サテライン』の司祭の娘です」

黒髪の女性はそのまま宮殿へと入って行った。  
そのまま彼女の部屋らしき所に連れていかれた。

「さあお話ください。あなたの過去を」

アルティーは今までの事を全て話した。

母親の事、魔法の事、魔術師の事、執事の事、逃げて来た事。

「まあ、そんなひどい過去があったのですね……」

俯いて自分の事のように考える黒髪の女性。

「あなた、アルティーと言ったわね。これからの予定はあるの？」

「予定って魔法が使えるようになりたいだけで、でも今は無いかなあ」

「そうですか……ならばらく私の所で泊まっても良いですよ」

「本当！？ありがとうございます。そうさせてもらう」

するとドアをノックする音が聞こえた。

「すみません！外に謎の二人が倒れていたので確保したのですが、正体未明の意識不明で、司祭様が居ないので……」

兵士であろう声だった。

「わかりました、今行きます」

黒髪の女性はそう言ってドアを開けた。

「待つて！あなたの名前は！？」

「私は……ディリンです」

黒髪の女性、ディリンは外に出ていった。

#### 第4話 偶然が重なる奇跡

ディリンは正体未明である二人の居る部屋へと向かっていた。

「その二人の特徴や見つけた時の状況を教えてください」

ディリンは兵士に尋ねた。

「はつ。旅人の剣士のようでしたが、見つけた時に武器は無く、石壁が破壊され岩石が周りありました。ひどい傷を負っています」

ディリンと兵士はその部屋に着き、扉を開けた。

そこには深手を負った二人が居た。

「これはひどい……魔物に……いや、こんな傷をつける魔物は見たことが無い。では何者？」

ディリンは初めて見るその傷に、途惑いを感じた。  
その二人は酷く魔されている様であった。

「とにかく、治療をしましょう、誰か治療道具を」

しかし誰も動く事は無かった。

「どうしたんですか？早くしないと命の危険が関わってるのですよ」

ディリンは不思議に思ったが、兵士は口を開いた。

「それが、どんな治療薬や薬草でも、嘘の様に効果が無いというか」

「そんな筈は無い。誰か治療薬を持ってきて！」

ディリンは少しだけ声が大きくなり、一人の兵士が治療器具を持ってきた。

慌てて受け取り、治療を試みたが、付けては消える様に効果が無くなっていく。

「そんな…このような傷は初めてです」

その時部屋に兵士が駆け込んで来た。

「司祭様がお帰りになりました！！」

その知らせを聞いたディリンは、父なら解るかもしれないと思った。

「父を、司祭様をここに呼んでください」

「もう来ておる」

外から声が聞こえた。そして一人の男が入ってきた。司祭である。

「例の二人は何処に？」

司祭は口を開いた。

「司祭様。ここでございます」

しばらく二人の傷口を見た司祭は、顎を触りながら口を開いた。

「これは、幻魔の力だな。それもかなりの使い手のようだ」

「幻魔？幻魔とはなんですか？」

司祭の言葉に尋ねるディリン。

「ん……まあ、闇の力って事だよ。正体は解らないけどね。でもしっかりとした治療法はある」

そう言つと司祭は何かを念じる様に合掌した。すると目が眩むような眩い光が辺りを包んだ。

二人の傷口から漆黒の影が煙のように抜けていった。

すると二人の傷口は、先程の事が嘘であつたかのように、傷が癒えていった。

「ん、ぐう……」

片方の緑色の髪をした男は目を覚ました。その男は辺りを見回すと司祭を見つめた。

「あんたが治してくれたんだよな？なんだか解らないけど解る。ありがとう」

その男はさっきまで眠っていたのに、理解していた。

「まあ、そんなとこだ。それより君は何者かな？」

司祭が言つと男は静かに答えた。



「俺はユリアン。元ロア・クリスタルの騎士。今は聖獣を求め、旅をしている。横の寝ているこいつはヴァン。不本意ではあるが、聖獣を探している仲間だ」

倒れていたのはユリアンとヴァンであった。

ユリアンがそう言っと、司祭は顎を触って考えている素振りを見せる。

「そうか。ちょっと興味があるな。私はここの司祭ホリスだ。回復したら後で私のところへ来てくれ」

そう言って手を差し出し、ユリアンと司祭ホルンは握手をした。

数時間が経ちヴァンも目覚め、二人でホルンに会いに行った。

「そうか、良くわかったよ聖獣と君たちの関係が、そして紅蓮の少しの事も」

ユリアン達はすべてを話した。

「君達の傷跡から、紅蓮の強さは覗える。そして君達がサンラインの兵に見つけられた偶然。知っているか？……偶然とは重なるものなのだ。偶然の重なるもの……それは奇跡。私にとっては悲しい知らせのようだが」

「奇跡？偶然？良くわかんねえこと言うな！」

ヴァンの本心であろう言葉だった。

「まあつまり、聖獣の仲間は今近くにいますと言う事さ」

「ホルンさん。ディリンって言いましたっけ？彼女の事でしょう？」

ユリアンは悟っていた。

「そうだ。だが偶然はそれだけじゃない。ディリンの連れ込んだ客。薄い眼の色だがアルティーと言う彼女もだな」

それは偶然が重なりになった。奇跡と言える産物であった。

「ユリアン君とヴァン君。暫く泊まっていてくれないか？ディリンとの別れは、父親として堪える」

そしてサンラインに暫く泊まる事となった。

暗く光が差し込まない不気味な洞窟。

「何い！奴等が死んでいない？馬鹿を言え！クロコダイルキャノン  
を食らったんだぞ！！」

そこから巨大な喚き声が聞こえてきた。

「しかし本当だルムルセヴァー。だがこのミスは許してやろう」

「ほお？それは何故だ？紅蓮の騎士さん」

ルムルセヴァーの前にはあの紅蓮の騎士が立っていた。

「貴様口を慎め。俺より下の身分。そして圧倒的な力の差」

「何を言つか紅蓮の騎士。俺は竜帝様によって生まれたもの。貴様  
より下の身分などは関係無い。実力は劣っているかもしれないがな」

「ちっ！いいか！サンラインに聖獣の後継者4人が運良く集まって

いる。そこを狙って抹殺して来い」

そう言つと紅蓮の騎士は消えていった。

## 第5話 光と闇

「ん……うん……朝か」

ベットから起きあがるユリアン。

今日は司祭ホルンが、娘デイリンと別れる宴の日だった。

「娘かあ、突然いなくなる時の父親って、どんな気持ちなんだろうか  
…仕方ないか」

一人呟くユリアン。

その時ドアをノックする音が聞こえた。

「デイリンです。少しお話が聞きたいのですが、宜しいでしょうか  
？」

「ああ、構わない。入ってくれ」

ユリアンがそう答える。

ドアを開けて入ってくるデイリン、とアルティー。

「なんだお前もか」

ユリアンがそう言うトアルティーは不機嫌そうな顔をした。

「で、話と言うのは？」

「勿論、聖獣の事です。私が聖獣の後継者と言うのは、本当なので  
しょうか？」

ディリンは悲しそうな表情で尋ねた。

「嫌なのか？それとも怖いのか？」

「怖くは在りません！しかし、私は後にここの神官になり、司祭も継ぐでしょう。それなのに……」

「行きたくないなら、来なくてもいい。でも俺達は2人でも聖獣を見つけないならならぬ。いや、俺1人でも……そして紅蓮を倒す。それができるのは聖獣の力を持つ者だけ。なんかさ、使命みたいなを感じちゃうんだよ」

ユリアンがそう言うした後で話を聞いていただけたの、アルティーも話し出した。

「あんたさあ、本当に！……それだけ？理由。自分のためとかじゃないの？永久追放されたって聞いたし、そのためじゃないの？」

アルティーはユリアンに近づきながら言った。  
ユリアンは暫く俯いた。

「かもな、たしかに俺は単純に強くなりたいだけかもしれない。でもいいじゃん。何かしら人は理由をつけて生きている。だから俺の理由はそれ……だからお前らもさ、理由をもって行動すれば？」

ユリアンは顔を上げ、堂々と言った。  
それを見たアルティーは少し笑った。

「そうだね。私も聖獣探し着いて行くよ！まだ魔法使えないから……」

足でまといになるかもしれないけど、魔法使えるようになって、お母さん元に戻す。だから……ヨロシク！ユリアン」

アルティーは右手を差し出した。

それを見たユリアンは、しっかりと握手をした。

「後で、ヴァンって人にも挨拶しなくちゃ」

それを見ていたデイリンは少し赤面した。

（ユリアンさんとアルティーさん……なんて大人なんだろう。私なんかわがままみたいに言っちゃって、馬鹿みたい）

「デイリン様！敵襲です！」

バタバタと駆け込んで来た兵士が言った。

ユリアンはそれを聞くと血相を変えて叫んだ。

「剣を！俺に剣を貸してくれ！」

近くに居た兵士が剣を差し出した。

それを受け取るとユリアンは、凄い勢いで走っていった。

「私の弓を持ってきて」

デイリンは言った。

そしてそのまま走っていった。

「アルティー様。これで身を守るだけはしてもらえませんか？」

兵士が持っていたのは銅製の杖であつた。  
アルティ―は頷きながら受け取つた。

(これで自分の事は守らなくちゃ)

「グオオオオオオオオオオオ!!」

大地が裂けんばかりの雄叫びをあげるレブルセヴァ。  
その雄叫びに引き寄せられ、森の中から100頭ほどのモンスター  
が現れた。

レブルセヴァ―の強襲が始まつたのだ。

「間違いない。あの雄叫びは紅蓮の獣だ」

ヴァンは断言した。

ヴァンは岩の上に立っていた。



「ヴァンさん！？こんな所で何を！？武器を持っていないじゃないですか！」

ヴァンを見つけたデイリンは叫んだ。

「デイリンだっけ？武器なら持ってるよ。俺の槍は親友だ。駆け付けてくれる……そうだろ？装填十字槍」

ヴァンが空を見上げたその時だった。  
狼の獣がヴァンに飛びかかって来た。

「危ない！！」

デイリンは自分の弓矢で射貫こうとするが、ヴァンに当りそうで射貫けない。

空から光、一本の雨。  
それは獣を貫いた。

「ありがとう。助かったよ装填十字槍」

ヴァンはそう言って、地面に獣と一緒に刺さっている装填十字槍を抜いた。

さあ闘いの時だ。

後から駆けつけてきたユリアンとアルティー。  
そしてサンラインの兵士達。

100頭はいる獣達。サンラインの兵士は50人ほど。

それでも必死の思いで闘った。

何匹も何匹も倒した。でも終わらない戦い。  
しかし最後の刺客が出てきたのであった。

空を通っていく巨大な驚獣。

それに捕まっているのはレブルセヴァーだった。

「レブルセヴァーだ」

ユリアンは震えた。そしてヴァンも。

武者震いなのか恐怖なのか、真相を確かめるため走った。  
サンラインの兵士は獣と闘った。

ユリアン、デイリン、アルティー、ヴァンは、レブルセヴァーの目的地に走った。

そこは司祭の間。

扉を開け、息を切らしながら入ってきた聖獣の後継者達。

「会いたかったぜ、聖獣の後継者ども！！今すぐぶっ殺してやる！」

レブルセヴァーはあの奥義『クロコダイル・キャノン』の構えに入  
った。

「気をつける！あの闇の力だ」

ユリアンは言った。

それを聞いたホルンはユリアン達の前に走っていた。

「ホルンさん危ないです。ここは俺達に任せて」

「案ずるな、奴の闇の力は私の光で消せるかもしれん！！」

そう話しているうちにレブルセヴァ・腕は、前のように膨らんでいた。

そしてギロリと睨みつけると放った。

闇の光が目の前を包んだ。

その次に光が目の前を包んだ。

「何イ！！光の力だと！？」

「獣ごときに負けるわけにはイカンのだ」

光と闇が正面衝突した瞬間だった。

## 第6話 ホルン死す

光と闇。まるで渦のように辺りを呑み込んだ。

「ぐうう、この力は……光!!」

冷や汗のような物をかいていたレブルセヴァ。

その時だった、ホルンの腕はミシッと音を上げた。

ホルンは吐血している。

「歳には勝てぬ……な」

「ホルンさん!!しっかり!!」

わずかな光の漏れから、ホルンを見たユリアンは叫んだ。

「ホルン?まさか、あのホルンか道理で」

渦の光は力を失い、辺りは元に戻った。

心配そうに4人は、ホルンを囲む。

「早くやつに攻撃を加えろ!!あの技は溜めに時間がかかる」

ホルンは叫んだ。

それを聞くとユリアンは言った。

「アルティールとディリンはここに、ヴァン!!」

ヴァンは黙って頷く、そしてレブルセヴァーに向かって走った。

ユリアンも続いた。

「すまんないディリン。無茶するんじゃないよ。……聖獣の後継者か、親子ってのは似るのだな。じつは私も後継者だった。…それだけではない、アランとロイと一緒に闘った。それともう1人とな…余り知られてないが。」

初めて知る事実ではあったが、ホルンの瀕死状態のほうで気になった。

「いいか、役目を終えたら眼の色は戻る。だから眼の色が戻るまで闘え、それと聖獣の事は、ロアの王か、サントルに居る、ルージュと言つ者に聞け。わかつたな」

言い終えると満足したように目をつぶった。

ディリンはその場で父を抱いて泣き続ける。

アルティーは何が起きたのかもさえ、解らず混乱していた。

それでも本能は感じ取った。ビリツと腰のほうから何かが沸いた。

「解る。わかるよディリン…これって怒りだよ。怒りなんだよ……」

アルティーはそう呟いた。

今の感情に耐えるように震え、呆然と立ち尽くす。

ユリアンとヴァン。

二人もこの事実気付いている。

ホルンの力が後を押すように、レブルセヴァーと張り合っていた。互角もしくはそれ以上に。

「お前らいつの間に？こんなに強く……」

レブルセヴァーを焦り感じていた。  
それだけではなく疑問のような恐怖が生まれていた。

（聖獣の後継者つて一体、何だ？何故強くなる段段と…）

「グワアアアア！！」

レブルセヴァーは絶叫した。  
だがユリアンとヴァンは止まらなかった。

ユリアンの剣とヴァンの槍。  
二つの武器はレブルセヴァーに深く突き刺さった。

レブルセヴァーは苦し紛れに、振り払うように斧を振った。  
ユリアンとヴァンは見事に避けた。  
その時だった。

聞いた事の無い轟音。  
その正体は火炎の球。

レブルセヴァーに直撃すると、竜巻の火柱がレブルセヴァーを包んだ。

これはアルティーの力だった。  
アルティーの力…それは感情を物体に変える力だった。

しかしこれをコントロールできていなかったアルティーは、その場で倒れていた。

「くそがあああっああ！！！！！！！！」

レブルセヴァ は叫んだ。

火柱に包まれている事など関係無しに、『クロコダイル・キャノン』の構えに入った。

止めようと思っても火柱に包まれていて手が出せなかった。

一度目を離すうちにレブルセヴァーの腕は膨れ上がっていた。

「シネエエツエエー!!」

明らかに乱心しているレブルセヴァーは、クロコダイルキャノンを放った。

終わると思う絶望した瞬間だった。

ホルンと同じ光の力が放たれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2972a/>

---

紅蓮と聖獣

2010年12月10日14時52分発行